

聖書：ダニエル 8：1～27

説教題：夕と朝が過ぎるまで

日時：2015年1月11日

前の7章の幻はバビロンの王ベルシャツアルの元年にダニエルに与えられたものでしたが、今日の8章はベルシャツアルの第3年すなわち紀元前551年頃に与えられたものです。彼はここで別の幻を受けます。それは雄羊と雄やぎの幻です。その幻は次のようなものでした。一頭の雄羊が川岸に立っていて、その羊には2本の角がありました。一つの角は他の角より長く、それは後から出て来たものでした。この雄羊は西や北や南の方へ突き進み、どんな獣もこれに立ち向かうことができませんでした。そこでこの雄羊は思いのまま振る舞って、高ぶっていました。ところが見ていると今度は一頭の雄やぎが西の方から素早く飛び回って現れます。こちらには目と目の間に著しく目立つ一本の角があり、これが雄羊に近づいてこれを打ち殺し、踏みにじります。果たしてこれは何を意味するものでしょうか。これだけだと何のことかさっぱり分かりませんが、前の7章に続いてここでも御使いが解き明かしてくれています。20～21節にあるように、雄羊の持つ2本の角はメディアとペルシヤの王を指し、後から現れた雄やぎはギリシヤの王のことです。当時はまだバビロンが世界を支配していましたが、次の時代に世界を支配するのはメディアとペルシヤです。そしてその次に世界を支配するのはギリシヤです。

先にダニエル書2章でネブカデネザル王に示された4つの王国についての幻を見ました。あの巨大な像においてメド・ペルシヤとギリシヤはそれぞれ2番目の銀、3番目の青銅に当たることとなります。また7章で4頭の獣についての幻を見ました。そこでの第二の熊に似た獣、第三のひょうに似た獣も、同じくそれぞれメド・ペルシヤとギリシヤを指すと考えられます。これら2章と7章では、バビロン以降の世界史全体を概観する形での幻が示されましたが、今日の8章は、その中の特にペルシヤとギリシヤについての幻となっています。

この時、ダニエルはバビロンの時代に生きていましたが、やがてペルシヤ帝国の時代となります。先にメディアが力を表しますが、間もなくメディアよりも強い存在としてペルシヤが台頭します。そのメド・ペルシヤは高ぶります。その後ギリシヤが世界を支配します。雄やぎの著しく目立つ一本の角は、歴史を振り返ればアレクサンドロス大王のことだろうと言えます。彼は紀元前331年にペルシヤ帝国を

ガウガメラの戦いで破って世界を手中に収めます。しかし間もなくその角は折れてしまいます。すなわち 10 年も経たない紀元前 323 年にアレクサンドロス大王は死去します。その後、そこから 4 本の角が生え出ます。これも歴史を振り返ると誰のことか分かります。アレクサンドロス大王の死後、ディアドコイ戦争が起こり、カッサンドロスがマケドニヤを、リュシマコスがアナトリアを、セレウコスがシリヤを、そしてプトレマイオスがエジプトを支配するようになります。そして 9 節には、そのうちの一本の角から、また一本の角が芽を出したと言われています。これについてもこの後述べますように、歴史を振り返ると相当する人物のことが分かります。

ここまで読んで思うことは、歴史における神の支配はここまでのものであるということですが、ここで述べられていることは、当時まだ起こっていないことです。将来に属することです。ペルシヤが次の時代の支配者になるということばかりでなく、さらに 200 年も先のギリシヤのこと、その目立つ一本の角すなわちアレキサンダー大王のこと、さらにそこから分かれ出る 4 本の角のこと、さらにそこから出る小さな角のことまで述べられています。神が全知全能の神であるとは普段私たちが告白しているところですが、この幻を前にすると驚嘆せざるを得ません。改めてこの世界の歴史は成り行きで動いているのではないということを教えられます。表面上はそう見えても、より深いレベルでは神こそが歴史を支配し、導いている主であると教えられます。

しかしながら、この 8 章の中心ポイントはこの後にあります。ギリシヤの大きな角から 4 本の角が生え出ますが、そのことはさっと述べられる程度で、その後に出る一本の小さな角について 9 節から詳しく述べられています。この角は天の軍勢に達し、さらには軍勢の長にまでのし上がり、聖所すなわちエルサレムの宮を汚し、その基をくつがえすと言われています。これは誰のことでしょうか。歴史を振り返ってこれに相当する人はアンティオコス・エピファネスという人です。四分割された中のセレウコス朝シリヤの王です。彼について 9 節に南と東と麗しい国とに向かって非常に大きくなって行った、とあります。南はエジプト方面、東はペルシヤ方面、麗しい国とはイスラエルを指します。この彼は軍勢の長すなわち神にまで逆らい、常供のささげ物を取り上げる。常供のささげ物とは、出エジプト記 29 章 38～42 節に記されていますが、毎朝毎夕ささげるいけにえのことです。それをやめさせ、代わりにそむきの罪をささげると表現されるほどの冒瀆的行為をする。実際、このアンティオコス・エピファネスは。それまでプトレマイオス朝の下にあったイスラ

エルに支配権を持ち、エルサレムの多くのユダヤ人を処刑しました。また律法遵守を禁じ、聖書の写本を焼き、エルサレムの宮にゼウスの像を祭り、これを拝むように強要しました。紀元前 167 年のことです。この結果、真理は地に投げ捨てられたような状態となり、彼が思うまま振る舞うようになります。また 23～25 節で御使いが解き明かしているように、この彼は「横柄で狡猾な王で、あきれ果てるような破壊を行ない、事をなして成功し、有力者たちと聖徒の民を滅ぼし」ます。「彼は悪巧みによって欺きをその手で成功させ、心は高ぶり、不意に多くの人を滅ぼし、君の君に向かって立ち上がる」のです。

実にこの 8 章のポイントはこのような恐るべき王がやがて現れることを警告することにあります。具体的にそれがいつのことかは、ダニエルに見当がつかなかったとしても、です。ダニエルは示されたのです。神を信じる民にはまだまだ多くの苦しみの時代があるということ。バビロンが終わって、ペルシヤの時代になって平和になるのではない。やがて雄やぎが飛んで来てメド・ペルシヤを打ち倒す日が来る。そしてそこから 4 人の王が現れ、その内の一人からさらに恐ろしい王が現れ、彼が思うままに振る舞う日、悪が勝利を収めたような日が来る。そのことを主はこうして前もって警告されたのです。

しかしこの幻は、警告とともにもう一つのメッセージを与えるためのものです。それは慰めです。やがて現れる恐ろしい一本の角による暗黒の時代はいつまで続くのでしょうか。13 節で一人の聖なる者、すなわち御使いが問うのをダニエルは聞きます。「常供のささげ物や、あの荒らす者のするそむきの罪、および、聖所と軍勢が踏みじられるという幻は、いつまでのことだろう。」するともう一人の聖なる者が答えます。14 節：「2300 の夕と朝が過ぎるまで。そのとき聖所はその権利を取り戻す。」この 2300 の夕と朝とは具体的にどれくらいの期間を指すのでしょうか。気になるのは、実際の歴史の中でアンティオコス・エピファネスが神殿を荒らして圧制を保った期間でしょう。先に触れたように、彼が神殿を冒瀆してユダヤ人を激しく迫害したのは紀元前 167 年です。記録によるとそれは 12 月です。そして彼が死んだのは 164 年または 163 年です。従ってその期間は 3 年ほどです。一方、2300 という数字を年に置き換えると約 6 年 4 か月になります。これだと合いません。そこである人は、夕と朝を別々にカウントした合計が 2300 であると考えます。すると日数としては半分の 1150 日となり、約 3 年 2 か月となります。これだとぐっと近くなります。だからこちらの意味ではないかと言われます。しかし前回も述べた通り、

黙示的文書における数字は、字義的であるより象徴的な意味で使われ得るので、その解釈は慎重であるべきです。この 2300 という数字は、荒らす者が現れたら、その 6 年 4 カ月後または 3 年 2 カ月後に、その支配が終わると計算するために与えられたものとは思われません。むしろこの表現が伝えたいことは、神は長いとも短いとも言えるようなこの期間をすでに定めているということだと思われまます。その彼の支配にはリミットがある。その期間も神の主権の下、コントロールの下にあるということですから 25 節にあるように、時が満ちれば、「人手によらずに、彼は砕かれる」。神の不思議な御手が下って彼の治世は終わりになる。そして 14 節にあるように、聖所はその権利を取り戻すのです。すなわち正しい神殿礼拝が回復し、神の民の幸いが取り戻されるのです。

27 節にダニエルは、この幻を悟ることができず、幾日かの間、病気になったままだったとあります。あまりにも大きな内容で、驚きすくむのみだった。しかし彼は幾日かの後、起きて王の事務を取りました。すなわち彼はこの幻を心に留め、やがての日のことを思い巡らしつつも、この世でなすべき働きに従事していた。私たちも同じです。来たる日の約束を心に留め、仰ぎつつも、この世での自らの働きに仕えるのです。

以上のダニエル書 8 章。今日見て来たことを最後にもう一度簡単にまとめたいと思います。一つ目のことは、歴史における神の驚くべき支配についてです。何世紀も先のことを神はここでダニエルに詳細に示しておられます。時はまだバビロンの時代で、紀元前 550 年頃なのに、紀元前 167 年のアンティオコス・エピファネスのことまで触れています。約 400 年も先のことまでです。二つ目に学んだことは、その神のもとで非常な苦しみの時が神の民に臨むことがあるということ。真理が投げ捨てられ、悪が勝利したかのような日が来る。信仰生活の中心である聖所が覆され、信仰者たちが大変な迫害の下に置かれる時が来得る。しかし三つ目に見たことは、神は歴史の主として、その苦難の期間に日数を定めているということ。定めの時が来れば、神はさばきを行なって信じる者を救い出し、ご自身の勝利を明らかにされる。

これは今日の私たちにも当てはまることでしょう。私たちにももっと困難な時代が来るかもしれません。この章のように、国が、為政者が、私たちを取り巻く社会が、私たちの信仰の歩みに脅威的な存在となる日が来るかもしれません。しかしそのようなことが起こっても、それは少しも神にとって想定外ではない。悪の力が支

配する期間は限界づけられており、その日数は数えられています。ですから私たちはそのような状況でも慌てず、心騒がせず、主にこそ忠実に歩むようにと召されています。またこれは私たち個人の生活にも当てはまることでしょう。世界の歴史をここまで詳細に御手に収め導いている神は、私たち一人一人の生活の細かな事柄にも同じ主権を持っています。私たち個人の生活にも様々な苦しい時があるかもしれません。暗黒だけが覆っているような日があるかもしれません。「主よ、いつまででしょうか」とうめかざるを得ない。しかしこの章から教えられることは、神はきちんとタイムテーブルを持っておられるということです。そこから救い出す日をきちんと備えてくださっている。ですからこのことを見上げて、どんな困難の日にも主を信頼せよ、とこの幻は語っているのではないのでしょうか。どんな苦難の内にあっても、まことの主権者なる主を見上げて、この方に忠実に歩み続けよ！と。暗黒の中にあっても、その期間は定められています。それは2300の夕と朝が過ぎるまでです。その日が過ぎたら、聖所はその権利を取り戻す。すなわち神に信頼する者たちは、神が備えたもう本来の祝福、神がともにおられる真の豊かな祝福に生きることへ導かれるのです。